

Discussion Paper Series

---

University of Tokyo  
Institute of Social Science  
Panel Survey

---

東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクト  
ディスカッションペーパーシリーズ

いじめの経験割合、および被害者の属性：  
若年継続サンプルと若年リフレッシュサンプルによる比較

Proportion of Respondents Who Have Experienced Bullying,  
and Attributes of the Victims: Comparison between the Japanese Life Course  
Panel Survey Youth Sample and Refresh Sample

眞田英毅

(東北大学大学院/日本学術振興会)

Teruki SANADA

November 2020

No.124

## いじめの経験割合、および被害者の属性 —若年継続サンプルと若年リフレッシュサンプルによる比較—

眞田 英毅（東北大学大学院・日本学術振興会）

### 要約

本研究は、東京大学社会科学研究所が実施している若年パネル調査継続サンプルと若年パネル調査サンプルを用いて、2時点間の学校におけるいじめの規定要因の比較を行ったものである。学校におけるいじめに関して教育心理学の分野での研究は蓄積があるが、他方で社会的観点から見たいじめ研究というものは多くない。そこで本研究では、学校におけるいじめと社会階層の関連に着目し、いじめの件数が増加の一途をたどるここ10数年で、いじめの社会的な規定要因が変化したのかどうかについて分析を行った。結果、学校におけるいじめと社会階層の関連については2時点で一貫した結果は得られなかった。他方で、家庭の雰囲気がいじめられにくいといった結果が得られ、学級における友人関係などのみならず、学級や学校の枠組みをこえた社会的属性もいじめられる要因になり得ることを示した。

### 謝辞

本研究は、日本学術振興会 (JSPS) 科学研究費補助金・特別推進研究 (25000001, 18H05204)、基盤研究 (S) (18103003, 22223005)、特別研究員奨励費 (20J10278)、および東北大学人工知能エレクトロニクス卓越大学院プログラムの助成を受けたものです。東京大学社会科学研究所 (東大社研) パネル調査の実施にあたっては、社会科学研究所研究資金、株式会社アウトソーシングからの奨学寄付金を受けました。パネル調査データの使用にあたっては東大社研パネル運営委員会の許可を受けました。また、分析および原稿の作成に際し、東京大学の永吉希久子先生と東北大学の小川和孝先生より有益なコメントを多数いただきました。記して感謝申し上げます。

## 1. 問題の所在

本研究の目的は、いじめの経験割合および被害者の特性について、東京大学社会科学研究所が実施している若年パネル調査継続サンプル（以下、若年継続サンプル）と若年パネル調査リフレッシュサンプル（以下、若年リフレッシュサンプル）を比較して検討することにある。

いじめの認知件数<sup>1</sup>は増加の一途を辿っている。文部科学省が毎年行っている「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によると平成30年度のいじめの認知件数は小中高すべての種別で過去最大であった（図1）。

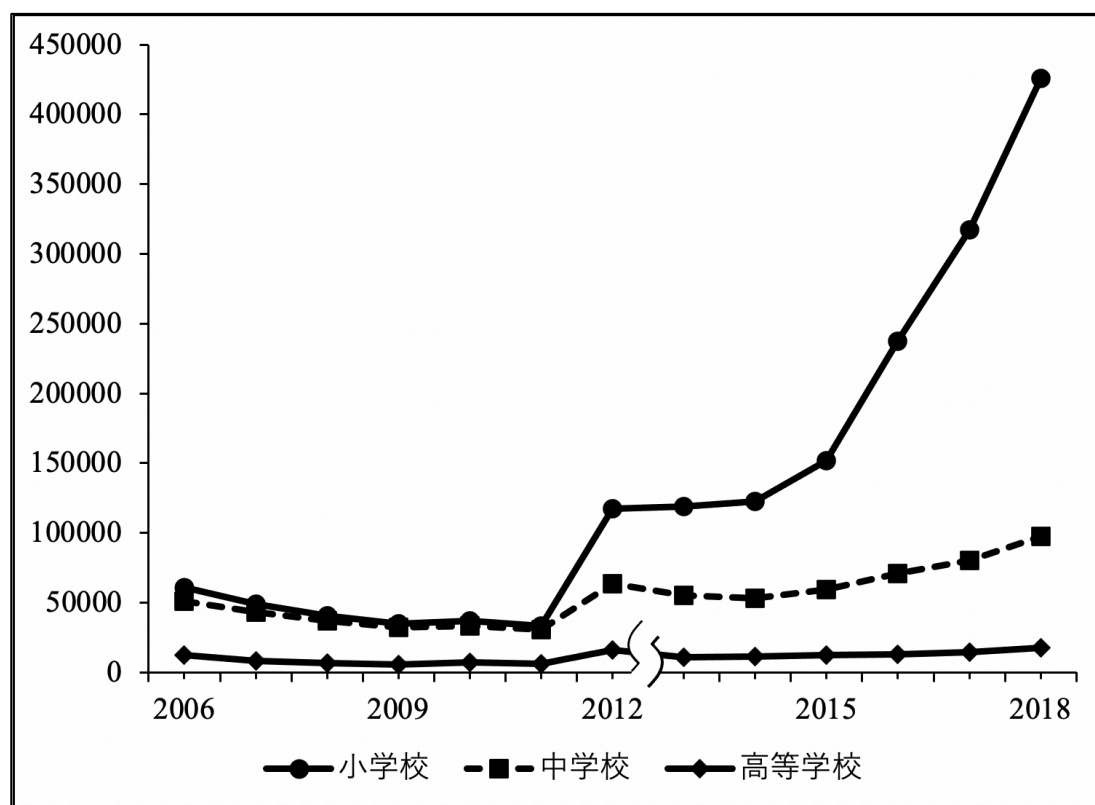


図1 いじめ認知件数の推移

（出典：文部科学省「平成30年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」<sup>2</sup>より筆者作成）

<sup>1</sup> 文部科学省は平成17年度までのいじめについては発生件数、平成18年度以降は認知件数という呼称を用いている。発生件数は、あくまで教職員や保護者などが把握した件数であり、真のいじめ件数については特定することは不可能だからである（国立教育政策研究所2013）。

<sup>2</sup> 高等学校については、2013年度から通信制課程を含めているので、2012年度から2013年度の間には波線を挿入している。

近年は実生活におけるいじめだけでなく、Twitter や Instagram および LINE などを用いたインターネット上でのいじめも確認されるようになってきている（内海 2010）。黒川（2010）は情報化の進展にともなうインターネットのいじめの特徴として匿名性をあげており、学校におけるいじめよりも被害者が加害者を特定することが難しいことを指摘している。このような匿名性はいじめ被害者が相談する際の困難さを助長している（藤・吉田 2014）。図 1 でみられる認知件数の上昇には、以前は存在しなかった、インターネットでのいじめも件数として報告されるようになってきていることも考えられる。

本研究では、このようないじめの認知件数の上昇および形態の変化から、いじめの経験割合およびその規定要因がここ 10 年でどのように変化をしたのか、2 つのパネル調査より明らかにする。これまで件数として含まれてこなかったようないじめ（例えばインターネットにおけるいじめ）が生じているが、いじめの経験割合も本当に増加しているのか、また、このようないじめの形態の変化は、いじめられる要因にも影響を与えるのか、の 2 点について比較・検討を行う。

## 2. 先行研究

いじめの研究分野は多岐に及び、子どもの心身の発達の観点から検討する教育心理学や子どもの非行行為としてとらえる犯罪心理学などがあげられる。これらの分野では、いじめのメカニズムや加害者および被害者の心理を理解することで、いじめを減らしなくすことを共通の目標としている。他方で、いじめを学校での 1 つの負の出来事と捉える社会学的な捉え方もある（中村 2018）。つまり、学校での負の出来事（いじめ、不登校、etc）が出身階層に起因するものであれば、その関連を弱める必要性があるという考えである。本研究もこの流れに位置づけることができる。

海外では社会経済的地位といじめに関して研究の蓄積があり、例えば Tippett and Wolke（2014）のメタ分析によって、社会経済的地位といじめ被害は微弱ながら関連が認められることが示された。特に、被害経験は社会階層と負の相関があることが明らかになった。日本における研究では Miwa and Ishida（2012）は国際教育評価学会が実施している「国際数学・理科教育動向調査」（Trends in International Mathematics and Science Study, 略称 TIMSS）の 2003 年データを用いて、個人の社会学的属性および学校における環境の関連を検討している<sup>3</sup>。その結果、男性よりも女性の方がいじめられやすく、15 歳時に本を多く所持している

---

<sup>3</sup> この他にも TIMSS の 2011 年データを用いていじめと学力の検討を行った研究として須藤（2014）がある。須藤（2014）は、学力の低い学生の方がいじめをやや受けやすいことや学校の学力水準といじめには明確な関連はないことを明らかにしている。

ほどいじめられやすいことを明らかにしている。また、中村（2018）は「教育・社会階層・社会移動全国調査」（Survey of Education, Social Stratification, and Social Mobility in Japan, 2013, 略称 ESSM）を用いていじめ被害の規定要因などを把握している。その結果、母親の学歴が高い方がいじめられやすいこと、家庭の主観的経済状況が貧しいほどいじめ体験が増えることを明らかにしている。

しかし、中村（2018）も述べているように日本で社会学的枠組みからいじめを捉えた研究はほとんどない。そこで本研究ではいじめの経験割合および規定要因の変化に着目する上で、特に社会学的属性の影響が変化しているのかどうかについて検討を行う。

### 3. データと方法

#### (1) データ

本研究で用いるデータは、東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクトが実施している「働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査」（Japanese Life Course Panel Surveys—JLPS）である。この調査は、2006年12月時点で20-34歳の若年層と35-40歳の壮年層を対象とし、2007年から毎年同一の回答者に質問紙調査を行っている。調査地域は全国であり、抽出では地点および都市規模により層化し、さらに性別・年齢で層化された2段階無作為抽出法が用いられている。

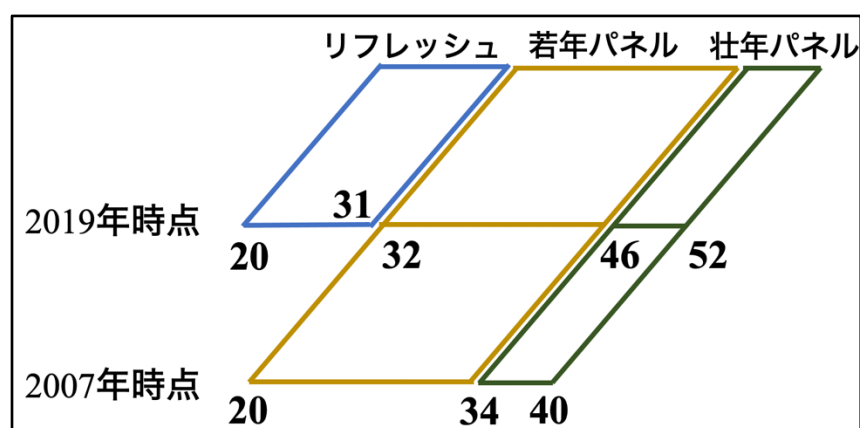


図2 若年継続サンプルと若年リフレッシュサンプルの位置づけ

パネル調査では同一の回答者に毎年質問をたずねるというその特性から、年を経るにつれて回答者の年齢が上がっていき、若年層が減っていくことになる。このようなことを考慮し、2018年時点で20-31歳の新しいサンプル（若年リフレッシュサンプル）を抽出し、若

年層のサンプルを補った（図2 参照）。若年層の捕捉はサンプルの補充という側面だけでなく、調査表も元のパネル調査と共通のものを使用しているため、コーホート間の比較が可能になる<sup>4</sup>。

本研究では、上記のような特性を活かし、いじめの経験割合や被害者の社会学的属性についてコーホート間で比較を行う。はじめに、記述統計などで各属性の経験割合の比較し、その後多変量解析にて要因を探り、比較を行う。

## (2) 変数

使用する変数は、いじめ経験割合、親学歴、親職業である。いじめ経験割合は若年パネル調査（Wave1）の問11および若年リフレッシュ調査の問5。「あなたは今までに以下のような出来事を経験したことがありますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。（○はいくつでも）」という質問で「10. 自分が学校でいじめを受けた」に○をつけた人をいじめ経験あり、それ以外をいじめ経験なしとした<sup>5</sup>。親学歴については、両親の最終学歴を「中学校・高等学校」、「専門学校・短期大学・高等専門学校」、「大学・大学院」の3つで分け、2人のうち高い方の親の学歴を採用した。また、親職業<sup>6</sup>については、「社会階層と社会移動全国調査」（略称：SSM調査）の職業大分類を参考に大きく「専門管理」、「事務販売」、「マニュアル」と3つに分け、こちらも2人のうち知識や技能がより必要だと思われる方の親の職業を親職業とした<sup>7</sup>。なお、学歴と職業ともに両親のうち片方の親の情報しかわからない場合や、父母どちらかがいない場合にはもう片方の親の情報をういた。

この他に統制変数として性別、年齢、15歳時の暮らし向き、15歳時の本の冊数、15歳時の文化資本、15歳時の家庭の雰囲気、15歳時の成績、兄弟姉妹数、ひとり親ダミーを用いた。15歳時の暮らし向きは「あなたが15歳だった頃（中学卒業時）、あなたのお宅の暮らしむきは、この中のどれにあたるでしょうか。当時のふつうの暮らしむきとくらべてお答えください。」という質問を用いる。回答は、「1. 豊か」～「5. 貧しい」という5件法を反転し、値が大きいほど暮らし向きがよいようにした。15歳の本の冊数は「あなたが15歳だ

---

<sup>4</sup> リフレッシュサンプルの基礎分析などの詳細に関しては仲・三輪（2020）を、コーホート比較については池田（2020）を参考にされたい。

<sup>5</sup> この設問は学校時代のいじめ経験を回顧的に尋ねるものであるが、本調査の対象は20～31歳という若年世代に限定されているため、回答者の記憶は比較的鮮明であると想定できる。

<sup>6</sup> 調査では学校でのいじめ経験についてたずねているため、15歳だった頃の親の仕事についてたずねた質問項目を用いた。

<sup>7</sup> SSMでは仕事において必要とされる知識や技能の種類と程度によって職業が分類されている（直井1978）。

った頃（中学卒業時）、あなたのお宅には本がどのくらいありましたか。雑誌、新聞、教科書、漫画、コミックは含めないでお答えください。」という質問を用いて、「0 冊（家に本は無かった）」を0、「1. 10 冊以下」を1、「2. 11 冊～25 冊」を2、「3. 26 冊～50 冊」を3、「4. 51 冊～100 冊」を4、「5. 101 冊～200 冊」を5、「6. 201 冊～500 冊」を6、「7. 501 冊以上」を7とリコードし、順序尺度として用いた。15 歳時の文化資本については、「あなたが 15 歳だった頃（中学卒業時）、お宅には次にあげるもののうち、どれがありましたか。」という質問で、20 項目ある選択肢の内、○をつけた個数を 15 歳時の所有文化資本とみなした<sup>8, 9</sup>。15 歳時の家庭の雰囲気は「あなたが 15 歳だった頃（中学卒業時）、あなたの育った家庭の雰囲気はいかがでしたか。」という質問を用いる。回答は、「1. 暖かい雰囲気だった」～「4. 暖かい雰囲気ではなかった」という 4 件法を反転し、値が大きいほど家庭の雰囲気がいいようにした。15 歳時の成績は「あなたが中学 3 年生のとき、あなたの成績は学年の中でどれくらいでしたか。」という質問を用いる。回答は、「1. 上の方」～「5. 下の方」という 5 件法を反転し、値が大きいほど 15 歳時の成績が上になるようにした。兄弟姉妹数はそれぞれの人数を合算し用いた。ひとり親ファミリーに関しては、15 歳時の両親の職業をたずねる質問で、「当時父はいなかった」、「当時母はいなかった」と答えた回答者を 1、それ以外を 0 として用いた。

## 4. 分析結果

### (1) 記述統計

まず、それぞれの調査のいじめの経験割合を比較する（表 1）<sup>10</sup>。今回の若年リフレッシュサンプルは先にも述べたとおり 20-31 歳を対象にした調査であったので、若年継続サンプルも年齢を 20-31 歳に限定している。図 3 が、2 つの調査のそれぞれのサンプルといじめ件数の変化の対応を記した表である。若年継続サンプルと比べ、若年リフレッシュサンプルの対象者はいじめ件数が増加している時期に学生時代を過ごしているといえる。

<sup>8</sup> 対象となった文化資本は、持ち家、田畑・山林（家庭菜園は除く）、風呂、自分専用の部屋、学習机、応接セット、ピアノ、テレビ、ラジオ、ビデオデッキ、冷蔵庫、電子レンジ、電話（携帯電話・PHS を含む）、百科事典、文学全集・図鑑、パソコン・ワープロ、クーラー・エアコン、自家用車、美術品・骨董品、別荘の 20 項目である。

<sup>9</sup> 濱本（2019）によれば、文化資本については個数が重要とする考え（片岡 1998）と、資本それぞれの性格によってそれぞれの階層に与える効果が異なるとする考え（野呂 1998）がある。本研究では前者の考えのもと、変数を作成している。

<sup>10</sup> なお、いじめ経験と独立変数との関連をできるだけ情報を落とすことなく確認することを目的とするため、多変量解析を行うまでサンプルを限定していない。

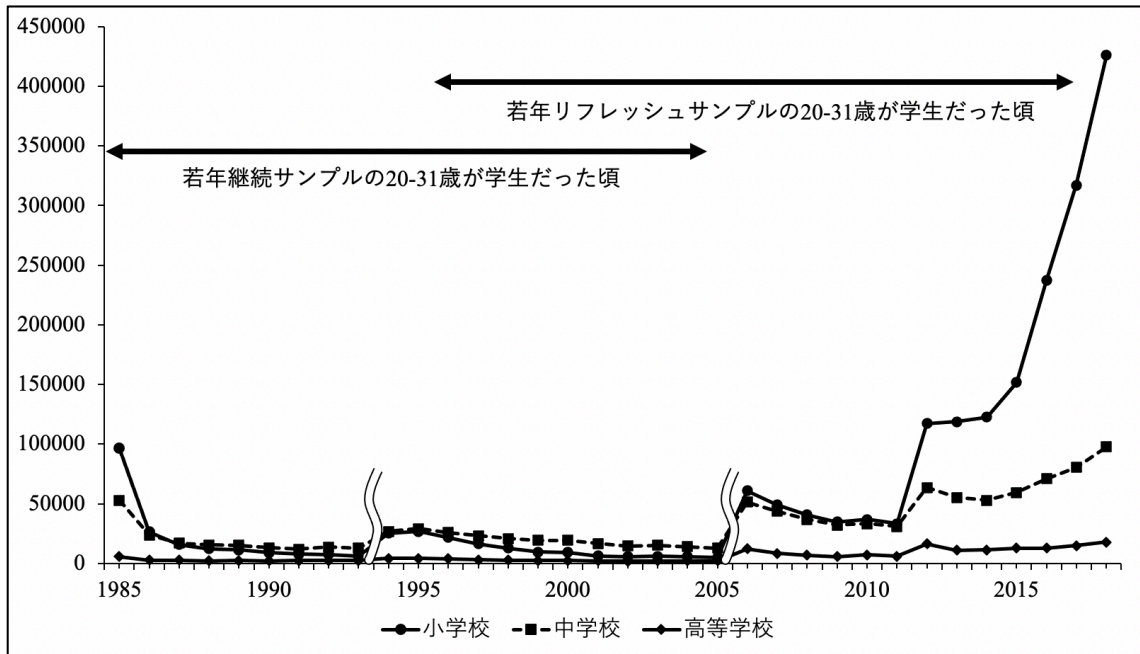


図3 本研究のそれぞれの調査といじめ件数の変化との対応

(出典：文部科学省「平成30年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」<sup>11</sup>より筆者作成)

この記述統計では全体の傾向から確認していこう。若年継続サンプルではいじめ経験割合は22.16%であったが、若年リフレッシュサンプルでは27.11%と5ポイントほど割合が高くなっている。これはいじめの認知件数の増加などと同じ傾向である。男女別にいじめの経験割合を見ると、どちらの調査でも女性の方が男性よりもいじめを経験する割合が高い。ただし、若年継続サンプルではその差は10ポイント程度であったが若年リフレッシュサンプルでは6ポイントにまで縮まっている。これは若年リフレッシュサンプルでの男性のいじめ経験割合が若年継続サンプルと比べて7ポイントほど高くなっているからである。これより、いじめの経験割合は一貫して女性の方が高いものの、男性のいじめ経験割合も2つの調査間で上昇していることが分かる<sup>12</sup>。

<sup>11</sup> 1994年と2006年に調査方法が改められている（文部科学省2019）ため、前後に波線を挿入している。

<sup>12</sup> 男性のいじめの経験割合が2つの調査間で関連があるかどうかを調べるため、行を調査に、列をいじめ経験の有無にしたクロス集計表にカイ二乗検定を行った。結果は、 $\chi^2 = 13.483, p < 0.001$ であり、2つの調査といじめ経験割合の有無に関連がないとはいえない。



表 1 いじめ経験割合の比較

|    | 若年継続サンプル      |                |                 | 若年リフレッシュサンプル  |                |                 |
|----|---------------|----------------|-----------------|---------------|----------------|-----------------|
|    | いじめ経験あり       | いじめ経験なし        | 合計              | いじめ経験あり       | いじめ経験なし        | 合計              |
| 男性 | 187<br>16.88% | 921<br>83.12%  | 1108<br>100.00% | 172<br>23.86% | 549<br>76.14%  | 721<br>100.00%  |
| 女性 | 315<br>27.23% | 842<br>72.77%  | 1157<br>100.00% | 261<br>29.79% | 615<br>70.21%  | 876<br>100.00%  |
| 合計 | 502<br>22.16% | 1763<br>77.84% | 2265<br>100.00% | 433<br>27.11% | 1164<br>72.89% | 1597<br>100.00% |

次にいじめの経験割合と親の学歴の関係について確認する（表 2）。左側の若年継続サンプルでは中学卒の人のいじめ経験割合が 1 番高くなっている。しかし、学歴の高低によって傾向があるわけではない。右側の若年リフレッシュサンプルでいじめ経験割合が 1 番高いのは大学卒である。しかし、若年継続サンプルと同様に傾向はみられない。

表 2 いじめ経験割合と親学歴との関連

|       | 若年継続サンプル      |                |                 | 若年リフレッシュサンプル  |                |                 |
|-------|---------------|----------------|-----------------|---------------|----------------|-----------------|
|       | いじめ経験あり       | いじめ経験なし        | 合計              | いじめ経験あり       | いじめ経験なし        | 合計              |
| 大学院   | 14<br>25.93%  | 40<br>74.07%   | 54<br>100.00%   | 8<br>25.00%   | 24<br>75.00%   | 32<br>100.00%   |
| 大学    | 164<br>23.50% | 534<br>76.50%  | 698<br>100.00%  | 162<br>30.06% | 377<br>69.94%  | 539<br>100.00%  |
| 短大・高専 | 32<br>21.62%  | 116<br>78.38%  | 148<br>100.00%  | 39<br>29.32%  | 94<br>70.68%   | 133<br>100.00%  |
| 専門学校  | 53<br>25.98%  | 151<br>74.02%  | 204<br>100.00%  | 45<br>26.16%  | 127<br>73.84%  | 172<br>100.00%  |
| 高等学校  | 167<br>20.44% | 650<br>79.56%  | 817<br>100.00%  | 141<br>25.92% | 403<br>74.08%  | 544<br>100.00%  |
| 中学校   | 31<br>30.10%  | 72<br>69.90%   | 103<br>100.00%  | 3<br>18.75%   | 13<br>81.25%   | 16<br>100.00%   |
| 合計    | 461<br>22.78% | 1563<br>77.22% | 2024<br>100.00% | 398<br>27.72% | 1038<br>72.28% | 1436<br>100.00% |

最後に、いじめ経験割合と親の職業について確認する（表 3）。若年継続サンプルでは職業がその他の人の経験割合が高いが、職業 3 分類で見ると一貫した傾向は見られない。若年リフレッシュサンプルでもその傾向は変わらず、その他の人の経験割合が高いが、職業の違いによる傾向は確認できない。

表3 いじめ経験割合と親職業との関連

|           | 若年継続サンプル      |                |                 | 若年リフレッシュサンプル  |                |                 |
|-----------|---------------|----------------|-----------------|---------------|----------------|-----------------|
|           | いじめ経験あり       | いじめ経験なし        | 合計              | いじめ経験あり       | いじめ経験なし        | 合計              |
| 専門職・技術職   | 105<br>23.97% | 333<br>76.03%  | 438<br>100.00%  | 113<br>28.32% | 286<br>71.68%  | 399<br>100.00%  |
| 管理職       | 42<br>21.43%  | 154<br>78.57%  | 196<br>100.00%  | 37<br>31.36%  | 81<br>68.64%   | 118<br>100.00%  |
| 事務職       | 93<br>20.81%  | 354<br>79.19%  | 447<br>100.00%  | 80<br>23.67%  | 258<br>76.33%  | 338<br>100.00%  |
| 販売職       | 64<br>19.10%  | 271<br>80.90%  | 335<br>100.00%  | 63<br>31.34%  | 138<br>68.66%  | 201<br>100.00%  |
| サービス職     | 42<br>22.46%  | 145<br>77.54%  | 187<br>100.00%  | 46<br>28.57%  | 115<br>71.43%  | 161<br>100.00%  |
| 生産現場職・技能職 | 107<br>25.18% | 318<br>74.82%  | 425<br>100.00%  | 46<br>24.21%  | 144<br>75.79%  | 190<br>100.00%  |
| 運輸・保安職    | 12<br>15.38%  | 66<br>84.62%   | 78<br>100.00%   | 11<br>25.00%  | 33<br>75.00%   | 44<br>100.00%   |
| その他       | 13<br>26.00%  | 37<br>74.00%   | 50<br>100.00%   | 3<br>37.50%   | 5<br>62.50%    | 8<br>100.00%    |
| 農林        | 1<br>6.67%    | 14<br>93.33%   | 15<br>100.00%   | 14<br>25.93%  | 40<br>74.07%   | 54<br>100.00%   |
| 合計        | 479<br>22.06% | 1692<br>77.94% | 2171<br>100.00% | 413<br>27.30% | 1100<br>72.70% | 1513<br>100.00% |

## (2) 多変量解析

ここまで、いじめ経験割合と社会的属性に関する2変数間の関連を確認してきた。最後にいじめの経験を従属変数とした二項ロジスティック分析を行い、その規定要因について男女別に比較を行う<sup>13</sup>。二項ロジスティックを行った結果は表4と表5の通りである。表4が若年継続サンプルの結果を、表5が若年リフレッシュサンプルの結果を示している。

最初に若年継続サンプルの結果を表4から確認する。男性のモデルでは、出身階層変数として投入した親学歴のうち、「大学卒・大学院卒」では1%水準の有意な負の効果が、「事務職・販売職」で5%水準の有意な負の効果がそれぞれ確認できた。これより、親が中学卒・高校卒よりも大学卒・大学院卒である子どもはいじめられにくく、親がマニュアル職よりも事務職・販売職である子どもはいじめられにくい。また、15歳時の文化資本では5%水準の負の効果が、15歳時の家庭の雰囲気も0.1%水準の有意な負の効果を示していた。つまり、15歳時の文化資本が多かった子どもはいじめられにくく、15歳時の家庭の雰囲気があたたかい子どもはいじめられにくい。対して、女性のモデルでは出身階層の変数は効果が確認されなかった。女性では15歳時の本の冊数で5%水準の有意な正の効果が確認された。つま

<sup>13</sup> 男女でいじめの内容などが異なることは石田・中村(2013)にて指摘されているため、性別で分けた分析を行った。

り、15歳時の本の冊数が多いほどいじめられやすい。また、15歳時の家庭の雰囲気は1%水準の、15歳時の成績は10%水準の有意な負の効果をもっていた。男性と同様に、家庭の雰囲気があたたかい子どもはいじめられにくい。さらに、成績がよい子どもはいじめられにくい。

表4 いじめの規定要因に関する二項ロジスティック回帰分析（若年継続）

|                               | 男性        |      |      | 女性       |      |      |
|-------------------------------|-----------|------|------|----------|------|------|
|                               | B         | S.E. | O.R. | B        | S.E. | O.R. |
| 切片                            | 0.88      | 1.10 | 2.41 | -0.22    | 0.89 | 0.80 |
| 年齢                            | 0.03      | 0.03 | 1.03 | 0.03     | 0.02 | 1.03 |
| 15歳時の暮らし向き                    | -0.02     | 0.13 | 0.98 | -0.08    | 0.11 | 0.92 |
| 15歳時の本の冊数                     | 0.04      | 0.07 | 1.05 | 0.11 *   | 0.05 | 1.12 |
| 15歳時の文化資本                     | -0.09 *   | 0.04 | 0.91 | -0.03    | 0.03 | 0.97 |
| 15歳時の家庭の雰囲気                   | -0.46 *** | 0.12 | 0.63 | -0.28 ** | 0.10 | 0.76 |
| 15歳時の成績                       | -0.05     | 0.08 | 0.95 | -0.14 †  | 0.07 | 0.87 |
| 兄弟姉妹数                         | 0.15      | 0.12 | 1.16 | 0.03     | 0.10 | 1.03 |
| 親 大学卒・大学院卒<br>(ref. 中卒・高卒)    | -0.68 **  | 0.26 | 0.51 | -0.14    | 0.20 | 0.87 |
| 親 専門卒・短大卒・高専卒<br>(ref. 中卒・高卒) | -0.35     | 0.30 | 0.70 | 0.13     | 0.23 | 1.14 |
| 親 専門職・管理職<br>(ref. マニュアル職)    | -0.34     | 0.28 | 0.71 | 0.02     | 0.23 | 1.02 |
| 親 事務職・販売職<br>(ref. マニュアル職)    | -0.65 *   | 0.25 | 0.52 | -0.05    | 0.20 | 0.95 |
| ひとり親ダミー                       | 0.09      | 0.46 | 1.10 | -0.03    | 0.41 | 0.97 |
| Nagelkerke R squared          | 0.08      |      |      | 0.04     |      |      |
| N                             | 761       |      |      | 824      |      |      |

\*\*\*  $p < 0.001$ , \*\*  $p < 0.01$ , \*  $p < 0.05$ , †  $p < 0.1$

次に若年リフレッシュサンプルの結果を表5から確認する。男性のモデルでは、出身階層を表す変数は有意な効果をもたなかった。その他の変数として、15歳時の本の冊数は5%水準で有意な正の効果をもっており、本の冊数が多いほどいじめられやすい。また15歳時の家庭の雰囲気と15歳時の成績は有意な負の効果をもっていた（前者は10%水準、後者は5%水準）。15歳時の家庭の雰囲気があたたかいほど、また15歳時の成績がよいほどいじめられにくい。他方、女性のモデルにおいて、出身階層の変数は、親の専門卒・短大卒・高専卒が10%水準の負の有意な効果をもっていた。つまり、親が中卒・高卒より専門卒・短大卒・高専卒の方がいじめられにくい。また、15歳時の文化資本では5%水準で有意な負の効果が

確認された。つまり、15歳時の文化資本が多いほどいじめられにくい。またこれまでと同様、15歳時の家庭の雰囲気も1%水準で有意な負の効果であり、家庭の雰囲気がよいほどいじめられにくかった。最後に、ひとり親ダミーが5%水準で有意な負の効果をもっていた。つまり、両親ともにいる子どもより、少なくともどちらかの親がいない子どもの方がいじめられにくい。

表5 いじめの規定要因に関する二項ロジスティック回帰分析（若年リフレッシュ）

|                               | 男性      |      |      | 女性       |      |       |
|-------------------------------|---------|------|------|----------|------|-------|
|                               | B       | S.E. | O.R. | B        | S.E. | O.R.  |
| 切片                            | 1.33    | 1.11 | 3.77 | 2.60 **  | 0.92 | 13.51 |
| 年齢                            | -0.04   | 0.03 | 0.96 | -0.02    | 0.03 | 0.98  |
| 15歳時の暮らし向き                    | -0.05   | 0.13 | 0.95 | -0.14    | 0.11 | 0.87  |
| 15歳時の本の冊数                     | 0.15 *  | 0.07 | 1.16 | 0.02     | 0.06 | 1.02  |
| 15歳時の文化資本                     | -0.05   | 0.03 | 0.96 | -0.08 *  | 0.03 | 0.92  |
| 15歳時の家庭の雰囲気                   | -0.23 * | 0.12 | 0.79 | -0.28 ** | 0.09 | 0.76  |
| 15歳時の成績                       | -0.18 * | 0.08 | 0.83 | -0.10    | 0.07 | 0.91  |
| 兄弟姉妹数                         | 0.06    | 0.11 | 1.07 | -0.06    | 0.11 | 0.94  |
| 親 大学卒・大学院卒<br>(ref. 中卒・高卒)    | -0.23   | 0.27 | 0.80 | -0.31    | 0.23 | 0.73  |
| 親 専門卒・短大卒・高専卒<br>(ref. 中卒・高卒) | -0.02   | 0.28 | 0.98 | -0.43 †  | 0.25 | 0.65  |
| 親 専門職・管理職<br>(ref. マニュアル職)    | 0.02    | 0.29 | 1.02 | -0.04    | 0.25 | 0.97  |
| 親 事務職・販売職<br>(ref. マニュアル職)    | 0.04    | 0.26 | 1.04 | -0.11    | 0.23 | 0.87  |
| ひとり親ダミー                       | 0.26    | 0.38 | 1.03 | -0.84 *  | 0.35 | 0.47  |
| Nagelkerke R squared          | 0.05    |      |      | 0.07     |      |       |
| N                             | 536     |      |      | 644      |      |       |

\*\*  $p < 0.01$ , \*  $p < 0.05$ , †  $p < 0.1$

## 5. まとめ

本研究では、学校でのいじめと社会的属性との関連について、2つの調査を用いて比較・検討を行った。以下に結果をまとめる。

いじめの経験割合は若年継続サンプルから若年リフレッシュサンプルにかけて増加していた。これはいじめの認知件数の増加と同じ傾向である。特に男性のいじめ経験割合は大きく増加しており、女性の割合に近づきつつあった。

若年継続サンプルと若年リフレッシュサンプルでは、学校でいじめられやすい社会的属性は異なっていた。出身階層として投入した親学歴<sup>14</sup>および親職業に関して、若年継続サンプルと若年リフレッシュサンプルにおいて有意な効果が確認できたものは少なかったが、両方の調査で効果がある変数とない変数があった。男性において、若年継続サンプルでは親の学歴の一部と職業の一部で、低階層出身者よりも高階層出身者がいじめられにくいという結果が得られた。しかし、若年リフレッシュサンプルでは学歴および職業の効果はみられず、15歳時の家庭環境と成績の悪さがいじめられる要因となりうる結果が示された。対して女性において、若年継続サンプルでは出身階層の効果は確認されず、家庭環境と成績のみ効果が確認された。しかし、若年リフレッシュサンプルでは親の学歴の一部で低階層出身者よりも高階層出身者がいじめられやすいという結果が得られた。このように、若年継続サンプルと若年リフレッシュサンプルにおいて出身階層および家庭環境の影響は変化しつつあることがうかがえた。興味深いのは親の学歴や職業が男性ではより若いコーホートにおいて効果をもたなくなる一方で、女性では効果がみられるという点である。ただし、これが実際の変化であることを示すには、さらなる検証が必要である。また、出身階層がいじめに与える影響がなぜ変化したのかについて、今後検討の余地があるといえよう。

唯一、男女ともに若年継続サンプルと若年リフレッシュサンプルで一貫して効果が確認できたのは15歳時の家庭の雰囲気である。すべてのモデルで15歳時の家庭の雰囲気があたたかい子どもはいじめられにくいという結果が得られた。家庭の雰囲気が子どもの発達において重要な役割を果たすことは想像に難くない。久保田（2013）はいじめの種類の中に異質者排除型のいじめが存在することを示しており、家庭の雰囲気により周囲とは異なる精神的状態であったりするために<sup>15</sup>、周囲から異質な子と見なされてしまうのかもしれない<sup>16, 17</sup>。

本研究では、学校におけるいじめの経験割合、およびいじめ被害と社会的属性との関連に関して検討を行い、経験割合は確かに上昇していることやコーホート比較によりいじめられにくい社会的な要因は存在し得ることを示した。学校におけるいじめは、本研究で用い

---

<sup>14</sup> なお、学歴をカテゴリ変数ではなく教育年数という連続変数に操作化することもできる。本研究でも最終学歴をそれぞれ教育年数に変換し分析を行ってみたが、結果は変わらなかった。

<sup>15</sup> 家庭の機能と子どもの精神状態に関する研究は数多くあり、例えば菅原ら（2002）では夫婦の愛情関係が家族機能（家庭の雰囲気など）を媒介して子どもの抑うつ傾向に影響を与えることを明らかにしている。

<sup>16</sup> ただし、家庭の雰囲気に関して、この調査で子どもの頃にパネル調査を行っているわけではないので、逆因果ということも十分考えられる。

<sup>17</sup> 家庭の雰囲気に関しては他にも、15歳時の家庭の雰囲気を悪いもの（当時を思い返すと厳しい）として回答している人々は、いじめという負の出来事をより記憶していきやすいという可能性もある。

た変数などの要因の他にも、複合的な様々な要因によって生じうる。本研究をもとに、学校におけるいじめと社会的属性を考慮に入れたさらなる研究の発展がなされることを期待する。

## 引用文献

- 藤桂・吉田富二雄, 2014, 「ネットいじめ被害者における相談行動の抑制—脅威認知の観点から」『教育心理学研究』62: 50–63.
- 池田岳大, 2020, 「JLPS-Y2007 と JLPS-R2019 を用いた男女差の 2 時点間比較」『東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクト ディスカッションペーパーシリーズ』123: 1–44, (2020 年 9 月 4 日取得, [https://csrda.iss.u-tokyo.ac.jp/panel/dp/PanelDP123\\_Ikeda.pdf](https://csrda.iss.u-tokyo.ac.jp/panel/dp/PanelDP123_Ikeda.pdf)).
- 濱本真一, 2019, 「所有財項目による階層的地位尺度の構成」『応用社会学研究』61: 117–31.
- Ishida, H. & S. Miwa, 2012, “School Discipline and Academic Achievement,” R. Arum and M. Velez eds., *Improving Learning Environments: School Discipline and Student Achievement in Comparative Perspective*, Stanford University Press, 163–95.
- 石田靖彦・中村友一, 2013, 「中学生のいじめ体験に関する研究—いじめの立場における心理的特徴」『愛知教育大学教育創造開発機構紀要』3: 123–30.
- 片岡栄美, 1998, 「地位形成に及ぼす読書文化と芸術文化の効果—教育・職業・結婚における文化資本の転換効果と収益」片岡栄美編『1995 年 SSM 調査シリーズ 18 文化と社会階層』1995 年 SSM 調査研究会:171–91.
- 国立教育政策研究所, 2013, 「いじめの『認知件数』」『生徒指導リーフ 11』, (2020 年 7 月 10 日取得, <https://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf11.pdf>).
- 久保田真功, 2013, 「なぜいじめはエスカレートするのか?—いじめ加害者の利益に着目して」『教育社会学研究』92: 107–27.
- 黒川雅幸, 2010, 「中学生の電子いじめ加害行動に関する研究」『福岡教育大学紀要』59: 11–21.
- 文部科学省, 2019, 「平成 30 年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」, (2020 年 7 月 10 日取得, <https://www.mext.go.jp/content/1410392.pdf>).
- 中村高康, 2018, 「学校における『いじめ』体験と社会階層」中村高康・平沢和司・荒牧章平・中澤渉編『教育と社会階層—ESSM 調査からみた学歴・学校・格差』東京大学出版会.
- 仲修平・三輪哲, 2020, 「東大社研パネル調査リフレッシュサンプルの基礎分析」『東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクト ディスカッションペーパーシリーズ』118: 1–11, (2020 年 7 月 10 日取得, [https://csrda.iss.u-tokyo.ac.jp/panel/dp/PanelDP118\\_Naka](https://csrda.iss.u-tokyo.ac.jp/panel/dp/PanelDP118_Naka)).

Miwa.pdf).

直井優, 1978, 「職業の分類と尺度」, 『社会階層と社会移動: 1975年SSM全国調査報告』  
1975年SSM調査委員会, 270-88.

野呂芳明, 1998, 「資産の形成・保有とその地域的特徴」 鹿又伸夫編『1995年SSM調査シ  
リーズ16 豊かさと格差』1995年SSM調査研究会: 69-85.

須藤康介, 2014, 「いじめと学力—TIMSS2011 中学生データの計量分析から」『江戸川学園  
大学紀要』24: 121-9.

菅原ますみ・八木下暁子・詫磨紀子・小泉智恵・瀬地山葉矢・菅原健介・北村俊則, 2002,  
「夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連」『教育心理学研究』50: 129-40.

Tippett, N., & Wolke, D., 2014, “Socioeconomic status and bullying: A meta-analysis,” *American  
Journal of Public Health*, 104(6): 48-59.

内海しよか, 2010, 「中学生のネットいじめ, いじめられ体験—親の統制に対する子どもの  
認知, および関係性攻撃との関連—」『教育心理学研究』58: 12-22.

## 東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクトについて

労働市場の構造変動、急激な少子高齢化、グローバル化の進展などにもない、日本社会における就業、結婚、家族、教育、意識、ライフスタイルのあり方は大きく変化を遂げようとしている。これからの日本社会がどのような方向に進むのかを考える上で、現在生じている変化がどのような原因によるものなのか、あるいはどこが変化してどこが変化していないのかを明確にすることはきわめて重要である。

本プロジェクトは、こうした問題をパネル調査の手法を用いることによって、実証的に解明することを研究課題とするものである。このため社会科学研究所では、若年パネル調査、壮年パネル調査、高卒パネル調査、中学生親子パネル調査の4つのパネル調査を実施している。

本プロジェクトの推進にあたり、以下の資金提供を受けた。記して感謝したい。

文部科学省・独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金

基盤研究 S：2006 年度～2009 年度、2010 年度～2014 年度 基盤研究 C：2013 年度～2016 年度 特別推進研究：2015 年度～2017 年度 若手研究 A：2015 年度～2018 年度  
基盤研究 B：2016 年度～2020 年度 特別推進研究：2018 年度～2024 年度

厚生労働科学研究費補助金

政策科学推進研究：2004 年度～2006 年度

奨学寄付金

株式会社アウトソーシング（代表取締役社長・土井春彦、本社・静岡市）：2006 年度～2008 年度

## 東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクト ディスカッションペーパーシリーズについて

東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクトディスカッションペーパーシリーズは、東京大学社会科学研究所におけるパネル調査プロジェクト関連の研究成果を、速報性を重視し暫定的にまとめたものである。





東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクト  
<https://csrda.iss.u-tokyo.ac.jp/panel/>